=市史編さん便り=　【４号】 令和４年５月６日(金) 発行.
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊土佐清水市教育委員会生涯学習課・市史編さん室

◎足摺岬小学校区の歴史＆文化財　特集号(1)

今月は、足摺岬小学校４～６年生の総合学習で校区の歴史と文化財についての出前授業を予定(諸事情で 13 日に延期)しています。そこで出前授業でお話させていただこうと考えている概要をざっと紹介させていただきます。

(1)縄文時代の松尾地区

松尾には、唐人駄場・山ノ神・スボノ口鼻等の縄文後期の遺跡が分布している。ここから大分県姫島から産出された灰白色の黒曜石を用いた大量の石鏃が表採されている。縄文後期の人々は、姫島の観音崎に露頭している黒曜石を求めて、太平洋から豊後水道・瀬戸内海と丸木舟で命をかけて荒海を行き来し、生活が成り立つよう努力していた。この姫島産黒曜石製の石鏃は、四万十川上流でもその散布地が広がっているほか、足摺半島の海岸段丘面に多く表採されている。

(2)中世(平安末期～安土桃山)の足摺岬地区 「補陀落信仰の聖地」

中世の方位観は、現在のそれと比べて大きく異なる。今はネットが発達して Google・Earth 等の衛星航空写真が地球上のどこであっても、簡単にその方位を簡単に調べることができる。しかし、中世の日本において一般の人々は方位を調べることは困難であった。ゆえにほとんどの人々は誤った方位をそれが正しいと認識し、思い込んでいた。

現在では、北海道や東北方面➔北方、九州南部や沖縄方面➔南方、関東➔東方、九州北部➔西方ということは日本地図を見れば明らかである。中世は、北方➔能登半島や佐渡国、南方➔紀州国熊野・土佐国室戸岬や足摺岬、北海道や東北方面➔東方、九州南部や沖縄方面➔西方として認識されていた。北海道や東北を関東の延長線上に東に歪めた形、九州や沖縄を真西に延長して歪めた形をイメージしている。

以上のように、中世の方位観は、日本国の最南端として熊野や室戸岬を位置付けており、足摺岬もその一つとして認識されていたのである。インド南海上に存在すると信じられていた「補陀落(洛)世界(観音が住むと伝えられる清浄な世界)」。そこに入る東端の入口が、熊野であり、室戸岬であり、足摺岬であった。そう信

土佐清水市指定文化財･嵯峨天皇勅額

じられていた。近世の『土佐物語』に記述されている「足摺七不思議」の「不増不滅の手水鉢」は、この補陀落信仰にまつわるエピソードである。弟子と師匠が補陀落渡海(船に乗り込み海に流されて補陀落をめざすこと・実際は死に至る)を試みた。弟子はその本懐を遂げ、補陀落渡海を終えたが、師匠は生への執着からそれを遂げることができなかった。師匠は岬上の岩の上で涙を流し、その涙が溜まって「不増不滅の手水鉢」になったというエピソードである。これは、足摺岬が全国的に補陀落信仰の聖地として認識されていたことを暗に示している。また、土佐清水市指定文化財の嵯峨天皇真筆の勅額「補陀洛東門」がある。この勅額は金剛福寺創建当時の弘仁 13 年(822)に弘法大師空海が嵯峨天皇より賜ったものと伝えられる。室町・戦国時代の松尾～足摺岬の様相については「市史編さん便り第 2 号」で記述したので省く。

(3)江戸時代の「松尾と足摺岬」

―紀州国印南浦(和歌山県日高郡印南町)の旅漁海民によってカツオ漁場開拓―

1600 年代中頃から先進的な漁労技術を持つ紀州国印南浦海民(和歌山県日高郡印南町)の旅漁海民により足摺半島を基地とし、その沖合でカツオ漁を行った。印南浦海民たちは、足摺半島の浦々(伊佐・松尾・明神・大浜・中浜・清水・越・養老等の港)にカツオ船を置き、土佐藩に漁業税を支払い臼碆沖で大規模なカツオ漁を展開した。

その中で有名な人物が、伊佐浦(足摺岬)を基地(据浦)とした石橋屋善市、松尾明神浜を基地(据浦)とした角屋与三郎である。

角屋与三郎(角屋三男)は、松尾地区の北方の丘陵地に建つ通称「旦那さんの墓」の旦那さんのことである。臼碆沖カツオ漁場を発見した人物と伝承される「熊野の甚太郎」の一族と伝承される。角屋は紀州国印南浦一帯を牛耳る鰹節製造販売の有力な廻船商人の家系である。初めは与三郎の兄・甚三郎(角屋長男)が角屋主人となり隆盛を極めていたが、甚三郎の跡継ぎである一人息子の与市が女中オサナと海(印南浦の高碆から)に投身自殺(心中) してしまう。

それ以降、角屋印南本店を甥の儀三郎に任せ、甚三郎は松尾の支店の経営に専念する。しかし、甚三郎が印南へ帰省途中に病死してしまう。そこで親族会議の結果、印南本店を定吉(角屋二男)が、松尾支店を儀三郎(定吉息子)が経営することになる。当時、儀三郎は 14 歳の少年であり、その後見人として甚三郎の叔父である与三郎が一緒に松尾に来たのである。実質の経営者・船主は角屋与三郎であった(3 頁系図参照)。

与三郎は、印南浦から連れてきた船子や地元で雇いあげた船子を集め、船団を組んで臼碆沖を漁場にカツオ漁を行った。大正 9 年 8 月 15 日、高知県西部を中心に甚大な被害をもたらした豪雨災害のとき、明神浜に注ぐ小川の岸から 12 基の釜跡が発見された(『土佐清水市史上巻』)。この釜跡は与三郎の納屋の跡ではないかと思われる。

与三郎は、松尾を愛し、松尾の地で終焉を迎えたいと考えていた。甥の儀三郎は与三郎の亡骸を松尾に葬り、下宿先の久武家に 1 反(300 坪)の土地を与え、その永代供養を依頼した。また、契約を交わし、松尾在住の清吉に永代の墓守とした。

(4)「漁の神様」として信仰された角屋与三郎

「旦那さんの墓」(日高与三郎の墓) には次のようなエピソードが伝えられる。昭和

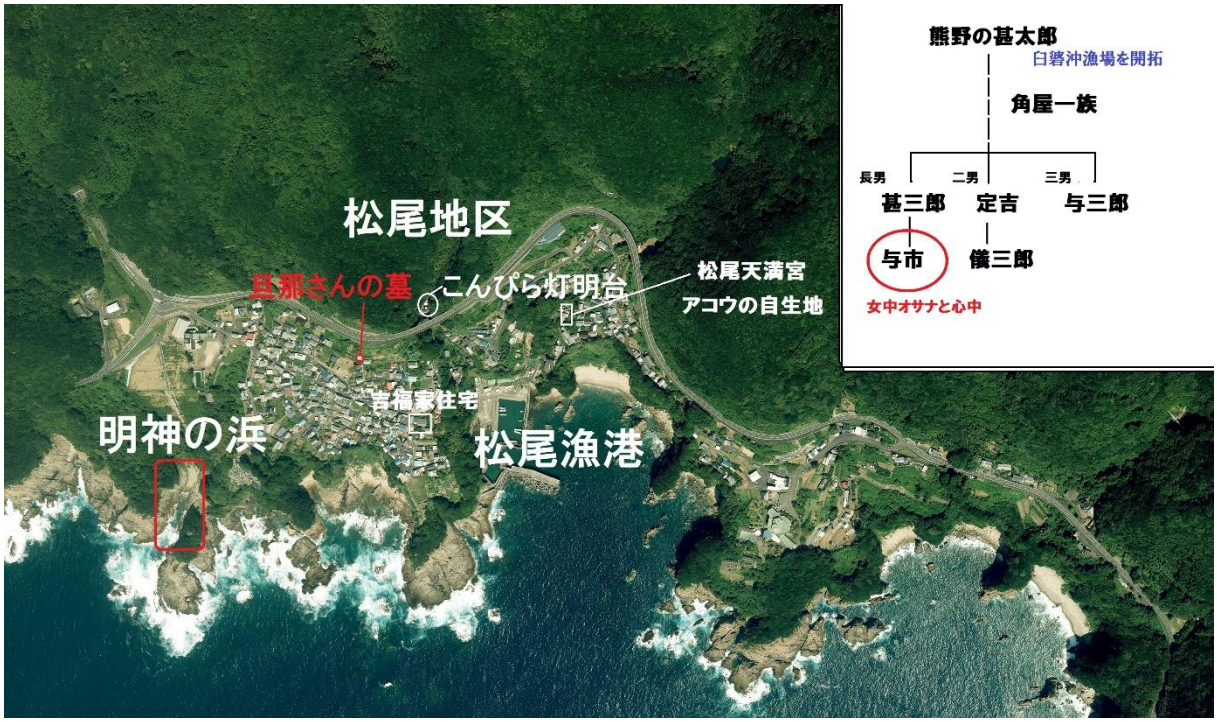
13 年（1938）和歌山市の旅漁海民・奥村熊太郎（高知県多ノ郷村大野見出身）が、松尾浦を据浦(基地)として船団を組み、釣ブリ漁を行っていた。不漁が続いて借金が嵩み、夜逃げの一歩手前まで追い込まれた。

藁にも縋る思いで、かつて松尾浦を据浦にカツオ漁とその節加工で成功をおさめた先人・日高与三郎のことを伝え聞き、墓碑に手を合わせ、豊漁を祈願した。「せめて船子が和歌山に帰省することができるくらいの漁をお与えください」と祈り願った。

その後の漁により、思いかけずブリの魚体が船に山をなし、船が銀色に輝くばかりの大漁となった。次の日も、また次の日も大漁は続き、運びきれないブリが、松尾漁港から集落道に横に並べられて置かれた。松尾の里話に「泣き止まないと、また、おかずにブリを食わすぞ…といったら子どもが泣き止んだ」とか、「毎夜、4 斗樽の酒を風呂に入れて船子をねぎらった」というエピソードが伝わる。

漁季を終えた奥村熊吉は、与三郎の墓碑に感謝のお参りを済ませ、堂宇を建てるよう住民に 200 円を預けて依頼した。また、金毘羅宮にも 50 円を寄進した。

このエピソードは、日高与三郎を神格化し、豊漁の神として益々崇められるようになった。墓碑の石は所々削り取られ、その信仰の厚さを物語っている。



【編集後記】皆さん。ゴールデンウィークは、ゆっくり静養できましたか？私は、期間中「2 日(月)」と「6 日(金)」がちょうど勤務日となり、飛石連休となりました。一見、残念に思える「飛石」ですが、勤務日が丁度カンフル剤となり、休みボケ防止には役立ちました。人間はある程度、束縛された方が生活リズムの維持にはよいのかもしれません。学生時代のラジオ体操や宿題と同じような感じがします。

次号では、太平洋戦争中の松尾地区女城鼻に所在する監視哨、足摺岬地区通称天狗山に所在する電探基地について詳しく記述したいと思います。また、松尾から足摺岬にかけては、太平洋戦争中につくられた防空壕が各地に点在しています。これらについて画像を入れながら紹介する予定です。